



Title	暴力とその禁止 : 「怒りの日」解説 (特集1 暴力論の現在)
Author(s)	櫻井, 典夫
Citation	層 : 映像と表現, 3, 19-23
Issue Date	2010-01-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71362
Type	article (author version)
File Information	Dies_irae_explanation.pdf



[Instructions for use](#)

暴力とその禁止——「怒りの日」解説

櫻井 典夫

「怒りの日——人類学と許しえぬもの」は文化人類学の研究者リュシアン・ケレルクによる《*Dies irae : Des constructions de l'indolérable et du contrôle de la violence chez les peuples indigènes*》の日本語訳である。

タイトルにある「怒りの日」とは、最後の審判を謳うラテン語詩よりとられたものである。この日、世界は灰燼と歸し、死者はその長き眠りより覚まされる。かつて地上に存在したすべての人間は、再臨したキリストの手によって、神の統べる天国に永遠の生命を授かる者と、地獄で永遠の責苦を受ける者へと選別されるのだ。

このタイトルには、二重の意味がこめられているといえよう。その一つは、暴力全般に対してわれわれが感じる怒りである。この怒りは、暴力そのものへと向かう怒りにも、暴力の遍在に

対する無力感を伴った、絶望に似た怒りにもなるだろう。

二つ目の意味、それは本論「怒りの日」のテーマである許しえぬ暴力の構築とより密接に関連している。歴史的・社会的に許容できる暴力と、できない暴力との境界を探るこの試みが困難を極めるのは、ラテン語詩「怒りの日」に登場する唯一無二の審判員（フランス語では *le juge*）や、それが象徴する絶対的審判が、今日ではもはや不在であるという事実にも因つていからだ。暴力における「許しえぬもの」の構築は、今日の人類学に課せられた重要な課題である。しかしそれは、なんらかの絶対的審判を措定し、そこから演繹的に成し遂げられるものではない。絶対的審判を掲げること自体、新たな暴力の引き金となりうるのだ。だからこそ、「許しえぬもの」の構築は、社会的・歴史的多様性のうちにおいてなされねばならぬことが、「怒

りの日」において再三強調されるのだ。とはいえ、それが容易な仕事でないことは想像に難くないだろう。

「怒りの日」はその多くをフランスの人類学者ピエール・クラストルに負っている。クラストルは、未開民族における戦争の意義を肯定的に評価した。絶え間なく行われる戦争に、自分たちの社会が国家へと発展することを拒む未開民族の意思をみてとり、国家の不在が伝統的の社会の発展の遅れを示すものではないことを喝破したのだ。これは、西欧優位のあり方から、文化相対主義的なあり方への転換を促すものであった。「怒りの日」では、このクラストルの考えが敷衍され、他者への服従を拒む伝統的の社会の自主独立の精神をその「通過儀礼」の儀式にも適応することで、許しえぬ暴力とはなにかについての独自の考察が展開される。たとえば、アイヌの女性に施された刺青である。刺青の開始時期は、六歳から七歳であったといわれているが、この年頃の少女が、刺青を入れるか否かの判断を自主的に行っていたとは考えにくい。それゆえ、刺青とは社会による一種の力の行使であったと考えられよう。しかし、ひとたび刺青が完成すると、それは社会の成員として迎えられることの自覚や誇りを思い起こさせる印にも変じるのである¹。一方ベルベールの刺青は、自主独立の意思をより強烈に誇示するものであり、従属を迫る他者に振るわれた身体的・精神的暴力に対する

抵抗を、自身の肉体の上でドラマ化したものとされるのだ。

要するに、アイヌやベルベールの刺青は、個体や社会体の身体的・精神的結束や、その自主独立のあり方を強固にする目的で行使される力とみなされているのである。それに対して、他の個体や社会体の独立を認めず、その従属を迫るばかりか、あまつさえその抹殺を図って行使される力も存在する。そして、後者のような力の行使こそが「許しえぬ暴力」と呼ぶにふさわしいものではないか、これが本論で見られた結論である。

限られた枚数の中で、許しえぬ暴力の構築とはなにかを概説する目的で書かれた「怒りの日」に、一般論的な性格がめだつことは否めない。とはいえ、この論文はこの先、著者クレルクの専門であるアイヌ研究に新たな視点をもたらす可能性を感じさせるものである。中でも、アイヌの伝統的儀礼においてその暴力的側面が際立つイヨマンテ（イオマンテ）に関して、その暴力も含めたより包括的な考察が期待できると考えられよう。

アイヌ文化におけるイヨマンテの中で、特に有名なのはキムンカムイ・イヨマンテ、すなわちクマの霊送り儀礼であろう²。イヨマンテとは本来、イ（それを）とオマンテ（行かせる）がつながった言葉であり、クマのイヨマンテの他、シマフクロウのイヨマンテなども存在した。また、それほど盛大には行われないものの、小動物や、使い古した日用品を送る儀礼も行われ

ていた。これらの儀礼はいずれも、人間世界を訪れ、人間の役に立つてくれた霊に対する感謝の気持ちを示すものであったといわれている。

クマの霊送りが行われた季節は主に冬から春先であった。春の山狩りでしとめたクマに仔グマがいた場合、その仔グマを村に持ち帰り、一年から二年、大切に育てたうえで、イヨマンテが行われるのだ。その儀礼の運びには地域差があるようだが、凡その流れで言うと、まずクマを檻から放し、十分に遊ばせる。それからクマに花矢が仕掛けられ、その後肉体と靈魂の分離が行われる³。靈魂が無事に帰るための祈りと、クマの解体とが続いた後に、旅立つ前のクマの霊を迎えて盛大な祭りが行われるのである。

クマの霊送りは、アイヌの社会において多くの機能を果たしていた。それはいわば、文化の継承や、生者・死者を交えたコミュニケーションの活性化を促す文化装置であった。イヨマンテを通じて、儀礼の際の言語や作法、歌や踊りの伝承が行われた。また、多くの人を招いて行われるこの儀礼は、村落同士の交流や結束を促し、特に若者にとっては、友情や恋愛を育む恰好の場になったといわれている。さらに、イヨマンテとあわせて、先祖供養という極めて大切な儀礼も行われたのである。

クマの霊送りによって得られる肉や毛皮もたいへん貴重で

あった。アイヌはこれらの貴重品を、カムイが人間の世界にもつてきたミヤゲであると考えた。そのミヤゲの中でもとりわけ貴重なのは、薬用となり、その交換価値も高いクマの肝であった。イヨマンテに先立ちクマは絶食状態に置かれることがあったが、アイヌによると、これは、人間の世界の食事に慣れたカムイが自分の住む世界に戻った際に、本来の食事を摂取しやすくするための気遣いであると説明された。しかし、その神話的説明の背後には、胆汁の分泌を促し、クマの肝の使用価値を高めるという合理的な思考が働いていたのである。イヨマンテにおいて仕掛けられる花矢も、子供たちの狩猟の練習や、カムイにもたせるミヤゲといった意味合いのほか、クマをいらだたせ胆汁の分泌を促す同様の目的があつたと考えられている。ただし、花矢を仕掛ける際に頭部は狙わないといった具合に、クマに対する敬意はしっかりと払われていた。

イヨマンテには大掛かりな準備が必要であるため、決行の日には前もって定められていた。そのためイヨマンテは年中行事的な意味合いも持っていた。さらに言えば、春の訪れに先駆けて生命の豊饒を願い、凜とした雪景色のなかで執り行われるイヨマンテは、地上の生を天体の運行に同期させるといって、いわば宇宙的な、壮大な拡がりをもった儀礼であつたと考えられるのである。

このように、イヨマンテとは、ある種の合理的な精神によって支えられた儀式であり、それはアイヌ社会の文化的、経済的、精神的諸側面において極めて重要な価値を持っていた。

ところが、一九五五年になって、北海道は「社会通念上または教育上好ましくない」こと、「野蛮な行為であり廃止されなければならぬ」こと等の理由をもって、イヨマンテの禁止を通過するに至るのである。この禁止通過自体は法的拘束力を持つておらず、イヨマンテの実施を完全に禁止するには至らなかった。そのため、一九五五年以降もイヨマンテを行うことは可能であり、実際に行われもしていた。とはいえ、クマの霊送り儀式を「野蛮な行為」とみなし、その撤廃を目指したこの通達は、近代以降のアイヌ同化政策に連なるものであり、それは本論の趣旨に従うのであれば、「許しえぬ」と呼ぶにふさわしい力の行使であったといえるだろう。

二〇〇七年四月になって、北海道がイヨマンテ禁止通過を撤回した旨が報じられたが、今度はその決定を巡り、様々な議論が巻き起こったことは記憶に新しい。動物の犠牲をとまじうイヨマンテの暴力的側面は、多くの動物愛護者をとまじわせ、その反発を招きました。こうしてみると、イヨマンテ禁止通過の撤回は、暴力の許容の限界を探るといって、「怒りの日」において紹介された、人類学における重要な課題の今日性とその困難

さを浮き彫りにする象徴的な出来事であったといえるだろう。

今日におけるアイヌの社会・文化的変容を研究するリュシアン・クレルクは、この問題をどう考えるであろうか。残念ながら、「怒りの日」そのものからは、この問いに対する直接の解答は得られない。しかし、その結び部分において、彼が「自分たちの許しえぬものに対する不寛容」という言葉を引き合いに出し、暴力と「許しえぬもの」についての人類学の構築には、それらをどの時代にも共通な倫理的価値としてではなく、個々の社会がその意味を自ら決定する政治的作業としてとらえる必要があることを強調している点は、この問題を考える上で多分に示唆的であろう。イヨマンテにおけるクマの殺害が、悼みや哀れみ、怒りなどといった様々な反応を引き起こすことは十分に理解できる。それでも「怒りの日」の筆者は、余りにも過剰な情緒的反応や倫理的価値観によって、アイヌの社会に対する理解が不十分なままに、イヨマンテが絶対的暴力禁止の袋小路に追いやられてしまう事態に対しては、しっかりと予防線をはっているように思われるのだ。

クマの霊送り儀式、とりわけ世界でも珍しい飼いがマ式の霊送り儀式は、その起源をはじめ、いまだに謎が多いとされている。その儀式の核心ともいえるクマ殺害の暴力も含めた包括的なイヨマンテ研究が、今後リュシアン・クレルクに期待される。

注

1 アイヌの女性に施された刺青には、この他に、健康のバロメーターとしての意味合いがあったとも考えられている。体調が良いときは濃い青色を示す刺青は、血行が悪くなると黒ずんだ青みを帯びるといふ（藤村久和『アイヌ神々と生きる人々』、小学館ライブラリー、一九九五、一三五頁）。これもまた、一見「野蛮な」風習の裏に、ある種の合理的な精神が働いていたことのあらわれと考えられよう。

2 イヨマンテの記述にあたっては、以下の書物を参考にした。『イヨマンテ』上川地方の熊送りの記録』、小学館、一九八五。『イヨマンテ』日川善次郎翁の伝承による』、白老町（北海道）・アイヌ民族博物館、二〇〇三。宇田川洋編『クマとフクロウのイオマンテ』アイヌの民族考古学』、同成社、二〇〇四。萱野茂『イヨマンテの花矢』、朝日新聞社、二〇〇五。木村英明、本田優子編『アイヌのクマ送りの世界』、同成社、二〇〇七。

3 心臓を矢で射るか、丸太には喜んで圧死させる。丸太にはさむ前に心臓を射ることもあったようである。